

■ ⑬～⑱ 八幡宮周辺からさらに足を延ばして

⑬ 尼野氏別邸・大歌堂中村邸

大正6年ごろ、大阪道頓堀「弁天座」の座主・尼野貴之氏の別邸として建てられ、平成24年に国の登録有形文化財に指定された。大歌堂と称される座敷は、折り上げ格天上が張られた15畳の大広間などを備えた近代数寄屋風書院造となっている。
放生川にかかる安居橋と蔵の風景は、八幡宮の麓の貴重な歴史的景観を作っている。



⑭ 淀屋辰五郎旧邸跡

江戸時代の豪商・淀屋一族が住んだ邸宅。初代・常安は徳川家康に味方し、300石を与えられ八幡に住んだ。やがて大阪・中之島の開発や米市場の開発などで財をなした。
2代目・言当の時期に、諸大名の倉米販売や大名貸しで日本一の豪商に成長した。この地は2代目以降の当主の別邸で、言当は男山の谷水を、放生川を越えて邸の庭に引き入れた。笕を流れる水の音がドーン、ドーンと響くことから、邸横の辻は「ドンドの辻」と呼ばれた。



⑮ 飛行神社

日本航空界の先駆者・二宮忠八の篤志によって、大正4年に邸内に建立された航空殉難者の霊を祀った神社。忠八は幼いころから飛行機に興味を持ち、初めてゴム動力を使った「カラス型模型飛行器」を飛ばした。実用化に向けた「タマムシ型」の開発を軍当局に願い出たが許可されず、自力での研究に努めた。しかし、ライト兄弟に先を越され、研究を断念した。例祭は、飛行実験に成功した4月29日に行われている。また、忠八ゆかりの品々を展示している資料館もある。



⑯ 後村上天皇行宮跡(ごむらかみてんのうあんぐうあと)の碑

高さ4mの大石塔で、もとは八幡宮社務田中家の屋敷跡である。後村上天皇が京都遷幸の途次、一時皇居に定められたところである。碑はそれを記念し、昭和3年に建立された。
1352年閏2月、南朝方の後村上天皇は、吉野から八幡に行幸し、時の八幡宮社務田中定清を行宮とした。そして、北朝方の三上皇を八幡から追放し、支配権を握った。しかし、足利義詮が八幡を攻め、市内各所で戦いが繰り広げられた。
同年5月に天皇方は陣中の兵糧が尽き、八幡を脱出した。わずか3か月ばかりの皇居であった。



⑰ 単伝庵(たんでんあん)

臨済宗妙心寺派の寺で、慶長年間(1596-1614)に単伝瑞応和尚が、石清水八幡宮の鬼門にあたる場所に厄除け寺として建てたものである。
現在は「らくがき寺」の名で親しまれ、「大黒堂」という堂内の白い壁は願い事を書くらくがきキャンパスになっている。【注】拝観は土・日のみ。



⑱ 善法律寺(ぜんぽうりつじ)

正嘉年間(1257-59)に八幡宮検校・善法寺宮清が自身の邸宅を喜捨し、奈良東大寺から実相上人を招いて開山。以来、八幡大菩薩の霊場として今日に至る。
善法寺家は足利將軍家と縁が深く、善法寺通清の娘・良子は2代將軍・義詮に嫁ぎ、3代將軍・義満を生んだ。良子は当寺に多くの紅葉を寄進し、現在も数十本の紅葉が茂っている。また、赤穂浪士・大石内蔵之助の養子で、男山の太西坊に住んだ覚運の墓がある。



さくら歴史文化さんぽ

【さくらであい館オリジナルガイド】

★ さくらであい館から石清水八幡宮界隈をめぐるお散歩コース ★

さくらであい館や背割堤を楽しんだ後は、さくらであい館から八幡市内(石清水八幡宮界隈)まで足を延ばしてみたいかがでしょうか。八幡市郷土史研究家の監修のもと、比較的短時間でめぐることができる施設をご紹介します。
日程や時間にとらわれず、ご家族やお友達同士など少人数で八幡の歴史を歩きながらたどってみてはいかがでしょうか。



■ ①～⑦ 石清水八幡宮エリア



①一の鳥居

高さは9mあり、1636年に松花堂昭乗の発案により石造りに改められた。額には「八幡宮」と独特な字形が浮き出し、特に八の字は向かい合った2羽のハトが互いに顔だけを外側に向けた形に作られている。この額は「平安の三蹟」の1人・藤原行成の筆によるものである。のちに「寛永の三筆」の1人・昭乗が1619年に行成筆跡の通り書写したものを銅板張りの額にしたものである。

②頓宮(とんぐう)北門と③頓宮殿

素木造檜皮葺四脚門で昭和3年に天皇の即位礼に際して京都御所内にある春興殿の正門として建てられたものを御大礼終了後に八幡宮に下賜されたものであり、左右の門扉に菊の御紋が彫り付けられている。

頓宮殿は878年に創建され、江戸時代に徳川吉宗によって再建された記録がある。下院、宿院、疫神殿とも言い、素木造りで檜皮葺の複雑な形をしている。建物内部は八幡宮本殿と同じく、中央に応神天皇、東に神功皇后、西に比売大神が滞在する内陣がある。

石清水祭の神幸の場となるほか、疫病を都に持ち込むことを防ぐ道饗(みちあえ)の祭り(現:青山祭)の舞台にもなっている。



④高良神社(こうらじんじや)

八幡神を九州の宇佐宮から男山へ勧請した大安寺の僧・行教により860年に創建されたとされる。社殿は鳥羽伏見の戦いで焼失したが、明治17年に再建された。

『徒然草』第52段には、京都仁和寺の法師が、石清水八幡宮と間違っ て参拝したことが記されている。



⑤源頼朝手植え松の碑

1195年に鎌倉幕府の将軍・源頼朝は石清水八幡宮に参拝した。その際に鎌倉から持参した6本の松の苗をこの地に植えたとされている。

最後まで残った1本の松は樹齢700年の巨木だったと言われているが、昭和22年8月の落雷により焼失してしまった。

碑の横にある松は有志によって昭和30年に献木された2代目頼朝松である。



⑥二の鳥居

表参道階段の登り口にある。もとは木造で額は無く、朱塗りだった。1642年に石造りに改められた。頓宮の南にあることから、「南鳥居」とも呼ばれた。

⑦航海記念塔

日宋貿易を行っていた尼崎の商人が岐路にて難風に遭い、八幡神に祈ったところ無事帰国することができた。そのお礼に五輪石塔を建立し、以来、航海の無事を祈って多くの船乗りが訪れるようになったことにちなむ。

五輪石塔は高さ約6m、幅約2.5mと日本最大級で、下から地輪、水輪、火輪、風輪、空輪という。この5種は死後の世界や宇宙の万物を構成する要素などと考えられている。

また、蒙古襲来の際に八幡宮に参籠し、異国調伏を祈った奈良西大寺の僧・叡尊が“神風”によって多くの元軍の命が奪われたことを悔やみ、その霊を弔うために建てたとする説もある。さらに、八幡神を九州の宇佐宮から勧請した大安寺の僧・行教の墓とする説など、さまざまである。



★余裕があれば立ち寄りたいスポット



★神應寺(じんのうじ)と杉山谷不動

860年に奈良大安寺の僧・行教により創建。もともとは応神寺と称したが、八幡宮の主祭神・応神天皇と同じ名前であることを憚り、神応寺となった。寺宝が多く、木造行教律師座像(重文)、普賢菩薩騎馬像、達磨図、豊臣秀吉衣冠束帯像、狩野山雪筆の障壁画などがある。

更に進むと、奥の院として杉山谷不動があり、厄除け不動として信仰され、夜ごと出没する悪鬼を鎮めるため、行教が弘法大師作の不動明王像を安置したとされている。【注】神應寺の拝観にはお寺への事前申込が必要です。

■ ⑧～⑫ 放生川と歴史的建造物



⑧放生川(ほうじょうがわ)

大谷川のうち、八幡宮麓の参道に沿って流れる部分を言い、864年から始まる放生会(現:石清水祭)の舞台となった為、この名が付されている。毎年9月15日の朝に関係者が川岸から魚や鳥を放つ放生行事が行われる。

また、八幡発祥の料理「八幡巻き」は、放生川の肥沃な泥土によって立派なゴボウが取れるようになったことで生まれた。「放生川の蜃」は八幡八景の1つ。

⑨安居橋(あんごばし)

通称は太鼓橋と呼ばれる。かつて放生川に架かる橋はたくさんあり、上流から三位橋、四位橋、五位橋などと名付けられていた。五位橋が修理のため、隣に架けられた仮設の橋(=相五位橋)がなまって安居橋になったという説がある。放生行事では橋の上で「胡蝶の舞」が奉納される。また、「安居橋の月」は八幡八景の1つ。



⑩相槌稲荷社(あいつちいなりしゃ)

平安時代の名刀匠・三条小鍛冶宗近が、一条天皇の命を受けて御剣を打つこととなり、相槌(助手)を求めて稲荷明神に祈願したところ、使いの狐が現れ、相槌となって剣(小狐丸)を打ったという。

また、『太平記剣巻』によると、源満仲がある刀匠に三種神器に准ずる神剣の製作を命じた。刀匠は石清水八幡宮に参籠して信託を蒙り、二振りの剣(髭切・膝丸)を満仲に献上した。

後世、この二振りは足利尊氏と新田義貞に伝わり、さらには徳川家康の手に入ったとされている。

⑪下馬碑(げばひ)

平谷町から八幡宮への登り口にあり、高さ約1.3mの大きな石に「下馬」と彫られている。弘法大師の筆法を学び、「寛永の三筆」と称された松花堂昭乗の筆跡と言われている。



⑫本妙寺(ほんみょうじ)

日蓮宗久遠山。安土宗論で犠牲になった普伝日門に帰依する竹内伊予守経孝によって1564年ごろ創立した。

1579年に安土で行われた日蓮宗と浄土宗の論争(安土宗論)の際に、日蓮宗の勢力拡大を喜ばなかった織田信長は、浄土宗側に加担し日蓮宗敗退の採決を下した。

この時に犠牲となって処刑されたのは本寺二世日門上人であり、門前に日門上人墓所の碑が立っている。

